



横山和佳奈さん(請戸)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：1月10日

大変な時に助けてもらったから、 今度は私の番だと思っています

横山さんご一家は、郡山市に住んでいらっしゃいます。平成25年7月号に掲載された父の浩志さんは、現在、南相馬市に単身赴任中。普段は母の恵美子さん、和佳奈さん、弟の知明君の3人で暮らしています。

震災当時、小学校6年生だった和佳奈さんは、まもなく大学生になります。また、18歳選挙権が施行されてから初となる選挙、参議院選挙が行われた時には、新聞社の取材を受けて堂々とご自分の意見を伝えています。(平成28年7月10日県内紙掲載)

今回の取材では、浪江から郡山に避難した後の学校生活や、これからの目標などを中心にお聞きしました。



▲センター試験直前のお忙しい時期にもかかわらず、取材を受けてくださいました。これからの和佳奈さんの人生が、幸多いことをお祈りします。

卒業までには一歩かかってみようと
思っています。

◆カウンセラーさんとの出会いが、将来の目標のきっかけに
震災の起きた日は、請戸小学校(以下、請戸小)6年生の卒業式の日の直前でした。浪江東中学校への進学のために、制服も注文していましたが、請戸のお店で採寸しただけで一回も着ることなく、両親や弟と共に郡山市にきました。
家の近所の郡山市の大規模な中学校に転校したのですが、まず驚いたのが生徒数の多さでした。一学年180人って請戸小の全校生徒数より多くないか…って、なにしろ請戸小は100人弱でしたから。最初はなかなか慣れなかつたのですが、クラスの出席番号が近い、私と同じ苗字の子がとてもよくしてくれて、徐々に打ち解けました。それから、2年に進級する時の「クラス替

え」も、請戸では考えられなかったもので、戸惑いましたね。でも、2年・3年の同級生とは、卒業したくないほど仲良くなりました。
中学校には浜通りから3人の生徒がいました。担任の先生から、カウンセラーの先生と話してみなさいとアドバイスされ、戸惑いながらもカウンセラー室を訪ねました。それまでカウンセラーという職業も知りませんでした。何度か先生と話をしていくうちに、心理学にとっても興味を持ちました。同時に、私自身が自覚していなかったものの、避難や転校に対するストレスが蓄積されていたのでしよう。あのような機会があれば、今頃は鬱々としていたかもしれません。
高校は、市内の私立高校の普通科に進みました。私立ということもあり、本当にいろんな人たちがいました。避難をしたことは話題にもなりませんでしたが、浪江の幼稚園で一緒だった男子生徒がいて、卒業までには一歩かかってみようと

◆大学進学と将来、そして選挙。おとなへの一歩を踏み出して
推薦で、第一志望だった東北福祉大学総合福祉学部への入学が決まり、仙台で暮らすアパルトも見つけました。将来は、今ならば熊本などの災害の現場で働くこと。あるいは学校でのカウンセリングの仕事を目指したいです。
また、初めて訪れた選挙の投票所は、おそかというか清潔な空気を感じ、とても印象的でした。両親に「選挙は行くべきもの」と幼い頃から言われて育ちましたが、選挙がより身近なものに思え、国会中継や街頭演説などを積極的に見聞きするようになりまし

浪江に対しては、町というより、生まれ育った請戸への思いが強いですが、昨年8月に行った時、家があった場所は更地になり、請戸小も未だに入れないままでした。辺りの景色も変わり、どんどん知らないところになつていくような気がします。
この年末に請戸小の仲間と久しぶりにグループ電話で話しました。当時、6年生の同窓会が久しぶりに実現できたらしいなと思っ

浪江の ころ通信

◆第69号◆



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のころ通信」が編集・発行されます。

浪江のころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこたわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

再取材シリーズ
再会・浪江のころ
これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。
3・11からまもなく6年。今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のころ通信／第69号」への感想をお寄せください。
【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のころ通信」宛
FAX.0243(22)4218



山形県

岡田 有一さん・貞子さん(大堀)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田
取材日：1月18日

6年間の月日を今ゆっくり取り戻しているところです 人のつながりは人生の大切な財産です

大堀地区にお住まいだった岡田さんご夫妻は、山形県、山梨県での暮らしを経て、一昨年夏から山形県に戻り暮らしています。山形で、震災により避難した方たちとつながりができ、共同で借りた畑で、無農薬野菜の栽培、研究に励んでいます。不安に過ごした6年を振り返り、その月日をゆっくり取り戻したいと話してくださいました。



▲左から有一さん、貞子さん

◆有一さんの話
こちらでは、今、雪かきが日課です。家にいるばかりでは体の調子が狂ってしまうので、春夏は、村山市の農園の手伝いと、自分の研究用に借りた畑に行っています。朝起きたら畑に行つて仕事をし、家に戻って朝食をとり、また畑に行く生活です。ずいぶん忙しくしています。
どちらも、震災後山形に避難した時につながった方の畑で、こちらに戻り、また声を掛けてもらいました。栽培方法を話し合い、今までより作物が大きく実り、喜んでもらうとなにより嬉しいですね。また、避難した皆と畑を共同で借り、自分の3a

の土地で無農薬野菜作りを始めました。浪江でも無農薬の米作りをしていましたが、山形でお世話になった分、何か形にして返したいという想いでやっています。育てた状況などを記録にとり、本で調べ、試行錯誤しながらの畑作りです。3年を目標にする予定で、高校時代より勉強している気がします。この年代になると、体も頭も動かなくなってきましたが、自分でやれることはきつとあるはず。自分の目標を持って恩を返していきたいと思っています。
冗談を言って笑い合い、支えてくれる仲間がいて、それが私たちの今の暮らしの安心につながっています。人のつながりは、人生の一つの財産だと思います。浪江の仲間やこちらで知り合った方々に改めて感謝しています。

◆貞子さんの話

一昨年夏の終わり頃に山形に戻ってきました。息子、娘達は一人立ちをして、そばにいてくれるし、安心していますが、それぞれが頑張っているの、自分でできることは自分で思っ

ているところです。
高校の同級生の皆とは、フルーティア列車に乗る旅に行ったり、福島でランチしたりしています。浪江にいた頃よくサンブラザで集まり話していました。また、大堀の婦人会は、年に何回か集まり、今も継続して活動しています。昔から一緒にいる仲間と楽しい時間です。昨年、会の一人が亡くなり、一人欠けただけでこんなにも違う、寂しいねと話しています。大堀地区は敬老会も継続しているので、負けていられませぬ。
春になると、近くの遊歩道に桜が咲き、庭の花も芽吹くので、楽しみにしています。近所の方からお庭見せてくださいと声を掛けてもらったり、ちぎり絵の教室に誘っていただいたり、色々な集まりに出させてもらい、慣れてきたところです。誘われたら断らないようにし、知り合った人から次の輪が広がっていくような気がしています。

震災から6年経ちますが、時間が止まっていたような、先に進まなかった6年間だった気がします。ゆっくり、その月日を取り戻したいと思います。



新潟県

木村江美子さん(川添)

取材者：(特活)くびき野NPOサポートセンター 新保
取材日：1月18日

浪江の思い出が少なくなってしまうのが寂しい

現在、新潟県の県央地域に位置する燕市で、家族と愛犬と一緒に暮らしている木村江美子さん。今回、近所に住む娘さん家族との生活や浪江への思いなどをお話いただきました。



▲新潟の冬では珍しい晴れ間の見えた日にお庭で

◆今の家族のかたち
震災発生後、郡山や会津を経て、割と早い段階で新潟県内に避難してきました。
現在は、新潟県燕市で空き家をリフォームした一軒家に、私の両親と三男の息子と一緒に暮らしています。主人は建築関係の仕事のため福島の浜通りへ戻り、長男は千葉県で暮らしているため、家族それぞれ離ればなれの生活に。ですが娘夫婦が近

所に暮らしていて、中学生と小学生の孫たちがほぼ毎日家に寄ってくれるので、子どもたちから元気をもらっています。
また、この3月で2才になるチワワの「ココ」もいます。ココは、新潟に来てから飼いはじめたのですが、実は福島生まれなんです。私たち家族との縁を感じますね。
最近では、こちらにいた同じ避難者の方や友人が市外または県外へ行ってしまい、そういった人たちとの交流が減ってしまったので、孤独感や不安感を感じることも多くなりました。この歳になると、新しいコミュニティに入りつたり、そこで馴染んだりすることがなかなか難しいです。

◆浪江への思い

浪江に住んでいたころは、リサイクル関係の自営業をやっていました。震災の影響で自宅は半壊だったので、借家だったため知らないうちに取り壊されていったんです。思い入れのある家や浪江の友人など、浪江の思い出がいつの間にか少なくなっていくのが本当に残念です。

「浪江のこころ通信」の原稿を募集しています

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、故郷を遠く離れて生活を続けている浪江の中学生、高校生、大学生の皆さん。浪江町で過ごした日々の思い出や、最近の出来事、将来の浪江町への思いなどを聞かせてください。応募方法等の詳細については、お問い合わせください。

浪江のこころプロジェクト事務局
(浪江町役場復興推進課情報統計係)
Tel 0243(62)4731

私自身、浪江に戻りたい気持ちはあるのですが、実際にどうするかは決めかねています。今でも浪江のことをよく思い出しますが、孫たちは浪江での記憶がほとんどないようなので寂しいですね。孫たちが自立するまで5、6年あるので、その間に家族で話し合い決めていければと思っています。



なみえ絆いわき会・ぐるりんこ隊

会長 **大波 大久**さん(川添)

ぐるりんこ隊 **田村 栄子**さん(北幾世橋)・**山田 美津**さん(牛渡)

山田比佐子さん(大堀)・**松本 祐子**さん(川添)

齋藤美恵子さん(川添)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島

取材日：12月22日



福島県

苦しい避難生活を支え合った仲間は一生の宝物です！



▲「ぐるりんこ」の活動を振り返る、
田村栄子さん(左)と山田美津さん(右)

▲いわき市にばらばらに避難した浪江町
民のつなぎ役として尽力した「なみえ
絆いわき会」会長の大波大久さん

▲左から 山田比佐子さん、松本祐子
さん、齋藤美恵子さん

山田比佐子さん 通常は玄関先で「なみえ交流館」で開かれる

山田美津さん ただ高齢の方はやはりお寂しい気持ちも抱えているのでしょね。浪江のことを話し出すと次から次に話が出て止まらなくなり、おいとましくなることもあります。

齋藤さん 浪江ではお付き合いのなかつた方をお訪ねするわけですが、浪江っていうだけのお互い気持ちがあつて通じるんですよ。浪江では苧野に住んでいたんだと聞いて、苧野に行つたことがなくても懐かしい気がする。あちらもそう思つてくださるのが嬉しいですね。

田村さん 浪江にいた時は、町の人みんなが集まって何かをするという機会はありませんでした。そもそも「ぐるりんこ」のメンバーだつて交流がなかったわけですね。いわきに来てこんな

大波さん いわきでは浪江町民向けの仮設住宅をつくつていただけなかつたので、誰がどこに住んでいるかもわからず、浪江の情報も入りにくい孤立した状況でした。震災の年の11月に、浪江町の健康診断の時にいわきに避難中の友人、知人の皆さまと顔を合わせたのがきっかけで「なみえ絆いわき会(以下、「絆会」)を設立したんです。当初は会員数80人ほどでスタートしましたが、今は家族も含め千人近くに上ります。

松本さん・齋藤さん 「なみえ交流館」では「絆会」の主催で新春餅つき大会、芋煮会といった交流会を年4回くらい開いてい

松本さん 同感です。避難してこんないい方たちに出会つた一悪い事ばかりじゃなかつたですね(笑)。

山田比佐子さん 帰町をめぐつて迷っている方も多いと思ひますが、うちは帰還困難区域なのでまだまだ先が見えないんです。前だけ見て生きていくしかないと思つています。

山田美津さん 気持ちとしては訪問活動を続けたいけれど、私たちも年を重ねていきますし、人を乗せて車を運転する以上、事故に遭つたらどうしようという心配もある。低料金でバスやタクシーが使える制度がいわきにもできると思ひます。



▲「ぐるりんこ」の活動メンバー
左から 田村栄子さん、山田美津さん、山田比佐子さん、松本祐子さん、齋藤美恵子さん

いわき市に避難した浪江町民が立ち上げた「なみえ絆いわき会」。

震災後、孤立した状態で暮らしていた町民に必要な情報を届けたり交流イベントを開催したりと、大きな役割を果たしてきました。

中でもユニークなのが女性有志による訪問活動「ぐるりんこ」です。同会の大波会長と「ぐるりんこ」のメンバー5人にお話をうかがいました。

◆会を結成したいきっかけ

大波さん いわきでは浪江町民向けの仮設住宅をつくつていただけなかつたので、誰がどこに住んでいるかもわからず、浪江の情報も入りにくい孤立した状況でした。震災の年の11月に、浪江町の健康診断の時にいわきに避難中の友人、知人の皆さまと顔を合わせたのがきっかけで「なみえ絆いわき会(以下、「絆会」)を設立したんです。当初は会員数80人ほどでスタートしましたが、今は家族も含め千人近くに上ります。

田村さん 震災直後は白河のほうに避難しましたが、息子の勤め先がいわきだったのでこちらに来ました。浪江にいた時は忙

◆「ぐるりんこ」の結成当初

松本さん そうそう。でも会いに行くとき喜んでくれて、感動してくださる方もいらつしやる。そのおかげで私も癒され、気持ちも落ちついていった気がします。私たち夫婦も息子たちと一緒にいわきに来たものの、知り合いも全然いませんでしたので。

しく走り回つていたので何も立っているのが辛くなり、お役にたつてほしいと山田比佐子さんの旦那さんから「ぐるりんこ」に参加しませんかと声をかけていただいたんです。

山田美津さん 私は猪苗代に避難した後、アパートが見つかったのでいわきに。浪江の方とお話したかったですし、「ぐるりんこ」のメンバーは旦那さんが役場のOBで知らない仲ではなかつたから、すぐに参加しました。

山田比佐子さん 私は仙台、裏磐梯に避難した後、娘夫婦の孫の世話をするためにいわきに来ました。「ぐるりんこ」に加わつた理由は美津さんと一緒です。最初は一軒一軒、自分たちで地図を調べてお宅を探るのが大変でした。自家用車で回りますが、土地勘がないし、表札を出していないお宅も多いから同じところを行つたり来たりしちゃうつたり。

松本さん そうそう。でも会いに行くとき喜んでくれて、感動してくださる方もいらつしやる。そのおかげで私も癒され、気持ちも落ちついていった気がします。私たち夫婦も息子たちと一緒にいわきに来たものの、知り合いも全然いませんでしたので。